

国見町文化財調査報告書(概報) 第3集

いし はら や ふさ
石原遺跡・矢房遺跡

—国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報—

2003

長崎県国見町教育委員会

発行にあたって

このたび平成10年度から平成13年度にかけて実施しました国見中部地区圃場整備事業に伴う石原遺跡・矢房遺跡の緊急発掘調査の報告書（概報）を発刊することになりました。

石原遺跡・矢房遺跡は、国見町のほぼ中央部に位置し、両脇を河川に挟まれたなだらかな丘陵上に所在します。南側には雲仙普賢岳がそびえ、頂上付近には平成新山と名付けられた溶岩ドームが噴火の生々しさを今に伝えています。北側に目を移せば、眼下には有明海が広がり、佐賀県・福岡県・熊本県までも一望することができます。遺跡からは、旧石器時代から中世までの幅広い時代の遺物・遺構が発見されており、特に旧石器時代の土石流の発見は、今も昔も火山活動などの自然の脅威に立ち向かっていく人間の強さを感じられます。また、古墳時代の住居跡からは多くの土器がまとまって発見され、当時の人々の生活・文化の解明には欠かせない資料となりましょう。そのほか、中世の墓と考えられる遺構からも完形品の土師器が多数発見されており、当時の人々の葬送に対する精神文化の解明にも一石を投じるものとなるでしょう。

国見町の緑豊かな農業地帯も、近年の農業基盤整備に伴い変貌しております。このような情勢の中で、祖先の貴重な文化遺産を保護し、これを後世に伝えることは、私たちに課せられた重要な責務であります。

本町では、このような事態に対処するため、遺跡発掘調査を行い保存・保護に努めてまいりました。調査の成果を公開する一つの手立てとして報告書を作成いたしましたが、遺跡の宝庫といわれる本町にとりましては、貴重な歴史と文化を理解するうえで大きな役割を果たすものと期待しております。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、県学芸文化課ならびに関係の皆様に衷心より感謝申し上げ発刊のことばといたします。

平成15年3月31日

長崎県国見町教育委員会

教育長 原 宮 之

例　　言

1. 本報告は1998年～2002年(平成10年度～平成13年度)に実施した国見中部地区県営圃場整備事業に伴う長崎県南高来郡国見町に所在する石原遺跡・矢房遺跡の緊急発掘調査の報告（概報）である。
2. 調査は、長崎県島原振興局の依頼を受け、国見町が実施した。
3. 調査は国見町教育委員会が担当した。

調査は1997年11月4日から1998年3月31日（平成9年度）に範囲確認調査を実施し、その結果をもとに下記の期間発掘調査を実施した。

1998年11月6日～1998年12月21日	(平成10年度)	石原1区～4区・矢房1区～2区
1999年5月18日～1999年9月13日	(平成11年度)	石原5区～6区・石原8区～10区
2000年3月7日～2000年3月31日	(平成11年度)	石原7区,11区・矢房3区
2001年1月11日～2001年3月26日	(平成12年度)	矢房4区～19区
2002年3月1日～2002年3月31日	(平成13年度)	石原19区～25区

4. 調査体制は次のとおりである。

調査主体	国見町教育委員会	教　育　長	阿比留　亨	(平成10年度～平成12年度)
	同	教　育　長	原　宮之	(平成12年度～現在)
	同	教　育　次　長	松本　安央	(平成10年度～平成11年度)
	同	教　育　次　長	吉田　正昭	(平成12年～現在)
調査担当		社会教育係長	江副俊一郎	(平成10年度～平成13年度)
	同	教　育　次　長	松本　安央	(平成10年度)
	同	文化財調査員	松崎由紀子	(平成10年度～平成11年度)
	同	社会教育係	辻田　直人	

5. 現地での遺構・遺物の実測は酒井由紀子・植木貴道・東文子・林繁美・松崎・辻田が行い、遺物の実測・製図は早稲田一美・濱本秀美・前田美保・酒井恵・竹中哲朗（文化財調査員、平成14年度～）・辻田が行った。写真は現地調査を松崎・辻田が、遺物写真は竹中・辻田が行った。
6. 遺構実測の一部は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
7. 火山灰検出・年代測定業務は（株）古環境研究所に委託した。
8. 空中写真撮影業務は（株）文化財環境研究所（現（株）九州文化財研究所）に委託した。
9. 本遺跡の遺物及び写真・図面等は国見町埋蔵文化財整理室で保管している。
10. 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標はI系による。
11. 現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。橋昌信（別府大学）、松藤和人（同志社大学）、佐川正敏（東北学院大学）、小畠弘己（熊本大学）、木村幾多郎（大分市歴史資料館）、平川　南（国立歴史民俗博物館）、長岡信治（長崎大学教育学部）、佐藤良二（二上山博物館）、早田勉（古環境研究所）、中川和哉（（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）、絹川一徳（大阪市文化財協会）、森川実、水ノ江和同（福岡県総務部国立博物館対策室）、大坪芳典（佐賀県教育委員会）、宮崎範行（熊本県教育委員会）、大野薰（大阪府教育委員会）、黒川忠弘（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、宮田浩二（宮崎県串間市教育委員会）、萩原博文（平戸市教育委員会）、川道寛（長崎県学芸文化課）、古門雅高（長崎県教育委員会）、渡邊康行（埋蔵文化財サポートシステム）、宇土靖之（長崎県有明町総合文化会館）、遠部　慎（長崎県南串山町教育委員会）、福岡旧石器文化研究会、長崎県教育委員会（敬称略・順不同）
12. 本書の執筆は竹中哲朗・辻田直人が分担し、各章及び各節文末に執筆者名を記した。
13. 本書の編集は竹中・辻田による。

目 次

卷頭図版

発刊にあたって

例言

本文目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 調査の経緯	1 p
第1節 発掘調査にいたる経緯（辻田）	
第3節 発掘調査の方法及び経過（辻田）	
第2章 遺跡の立地	6 p
第1節 国見町の概要（辻田）	
第3節 層位（辻田・竹中）	
第3章 旧石器時代	8 p
第1節 土石流（辻田）	
第2節 出土遺物（辻田）	
第4章 縄文時代	15 p
第1節 土坑・溝（竹中）	
第2節 土偶・土器・石器（辻田・竹中）	
第5章 古墳時代	39 p
第1節 住居跡・土坑墓（竹中）	
第6章 古代	45 p
第1節 土坑・溝・骨蔵器（竹中）	
第7章 中世	55 p
第1節 土坑・製鉄炉（竹中）	
第3節 古代から中世の特徴的な遺物（竹中）	
第8章 まとめ	71 p
第1節 旧石器時代について（辻田）	
第3節 矢房遺跡検出の古墳時代住居跡出土土師器（竹中）	
第4節 石原遺跡検出の古代土坑（竹中）	
付 猪之瀬遺跡中世土坑墓報告（91～93 p）	
第2節 縄文時代について（辻田）	
第5節 矢房遺跡検出の中世土坑墓（竹中）	
第9章 自然科学分析	94 p
第1節 石原遺跡の土層とテフラ	
第2節 放射性炭素（ ¹⁴ C）年代測定結果	

挿 図 目 次

第1図	石原遺跡・矢房遺跡位置図(1/20,000)	
第2図	TP 8 土坑出土遺物実測図(1/3) 1	
第3図	TP 8 土坑検出状況・出土遺物検出状況 (1/40・1/10) 2	
第4図	試掘調査トレンド設定図(1/5,000) 3	
第5図	調査区配置図 5	
第6図	石原遺跡基本土層図 7	
第7図	矢房遺跡基本土層図 7	
第8図	石原遺跡24区土石流検出状況① 8	
第9図	石原遺跡24区礫層下堆積状況 8	
第10図	石原遺跡24区土石流検出状況② 8	
第11図	石原遺跡出土後期旧石器時代の石器 (2/3) 9	
第12図	石原遺跡 a～e 区旧石器時代遺物分布 図(1/80) 11	
第13図	石原遺跡 a～e 区出土旧石器時代の石 器(2/3) 13	
第14図	石原遺跡24区Ⅲ層出土石器(2/3) 14	
第15図	石原遺跡層位外出土遺物(2/3) 14	
第16図	石原遺跡19区 SK02(1/20) 15	
第17図	石原遺跡19区 SK02・SD01出土遺物 (1/3・1/2) 16	
第18図	石原遺跡19区 SD01(1/20) 17	
第19図	石原遺跡19区 SD01出土石器 (1/3・2/3) 18	
第20図	石原遺跡22区・西壁 SD01セクション 図(1/40) 18	
第21図	石原遺跡22区 SD01(1/40) 19	
第22図	石原遺跡出土縄文時代早期土器① (1/2) 22	
第23図	石原遺跡出土縄文時代早期土器② (1/2) 23	
第24図	石原遺跡23区第Ⅲ層遺物分布図(1/60) 23	
第25図	石原遺跡3区縄文時代早期遺物分布図 (1/60) 23	
第26図	石原遺跡出土縄文時代早期土器③ (1/2) 24	
第27図	石原遺跡出土縄文時代早期土器④ (1/2) 25	
第28図	石原遺跡出土縄文時代早期土器⑤ (1/2) 26	
第29図	矢房遺跡出土縄文時代早期土器 (1/2) 26	
第30図	石原遺跡5区出土縄文時代前期土器 (1/2) 29	
第31図	石原遺跡5区出土遺物分布図(1/60) 30	
第32図	石原遺跡5区出土 その他の縄文時代土器(1/2) 30	
第33図	石原遺跡9区出土縄文時代土偶 (1/2) 32	
第34図	石原遺跡出土縄文時代晚期土器① (1/2) 33	
第35図	石原遺跡出土縄文時代晚期土器② (1/3・1/2) 34	
第36図	石原遺跡出土縄文時代早期石器 (2/3) 35	
第37図	石原遺跡5区出土縄文時代前期及び後 期石器(2/3・1/2) 36	
第38図	石原遺跡・矢房遺跡出土縄文時代晚期 石器(2/3・1/2) 37	
第39図	矢房遺跡16区古墳時代住居跡平面・セ クション図(1/30) 39	
第40図	矢房遺跡16区古墳時代住居跡出土遺物 ①(1/3) 41	
第41図	矢房遺跡16区古墳時代住居跡出土遺物 ②(1/3) 42	
第42図	矢房遺跡16区古墳時代住居跡出土遺物 ③(1/3) 43	
第43図	矢房遺跡16区土坑墓(1/40) 44	
第44図	石原遺跡8区 Pit01・出土遺物 (1/10・1/3) 45	
第45図	石原遺跡8区 SK01 (1/20) 46	
第46図	石原遺跡8区 SK01出土遺物 (1/3・1/2) 47	
第47図	石原遺跡8区 SK02(1/20) 48	

第48図	石原遺跡8区 SK02出土遺物(1/3)	49
第49図	石原遺跡24区 SK01(1/10)	51
第50図	石原遺跡24区 SK01出土遺物(1/3)	51
第51図	矢房遺跡4区骨蔵器検出状況写真	52
第52図	矢房遺跡4区出土遺物(1/3)	52
第53図	矢房遺跡12~13区 SD01出土遺物 (1/3)	53
第54図	矢房遺跡12~13区 SD01(1/40)	53
第55図	矢房遺跡3区 SK01(1/20)	55
第56図	矢房遺跡9区 SK01・配石・出土遺物 (1/40・1/3)	56
第57図	石原遺跡19区 SK01・出土遺物(1/40・ 1/3)	57
第58図	石原遺跡10区 SK01 —製鉄炉— (1/40)	58
第59図	石原遺跡10区 SK01出土遺物(1/3)	59
第60図	石原遺跡24区 Pit列(1/40)	60
第61図	石原遺跡24区 Pit内出土遺物(1/3)	60
第62図	石原遺跡4・8~10区掘立柱建物群 (1/200)	61
第63図	石原遺跡4・8~10区掘立柱建物群 SB 01~04(1/400)	62
第64図	石原遺跡4・8~10区 SB01(1/100)	63
第65図	石原遺跡4・8~10区 SB02(1/100)	63
第66図	石原遺跡4・8~10区 SB03(1/100)	64
第67図	石原遺跡4・8~10区 SB04(1/100)	64
第68図	石原遺跡6区道路・区画遺構(1/100)	65
第69図	石原遺跡20区 SD01・SD02(1/80)	67
第70図	石原遺跡出土墨書・刻書土器(1/3・1/1)	68
第71図	石原遺跡・矢房遺跡出土青磁片・石製品 (1/3・1/2)	68
第72図	古代から中世の特徴的な遺物(1/3)	69
第73図	石原遺跡a~e区遺物分布図(1/160)	73
第74図	縄文時代早期壺形土器一覧図(1/6)	77
第75図	長崎県諫早市下峰原高場遺跡壺形土器 (1/2)	78
第76図	島原半島検出の住居跡出土土器の様相 (1/6)	85
第77図	大野原遺跡・七反畠地区廃棄土坑出土 遺物(1/6)	89
第78図	今福遺跡2号木棺・林ノ辻遺跡2号土 坑(1/40)	91
第79図	猪之瀬遺跡土坑・出土遺物実測図 (1/40・1/3)	93
第80図	自然科学分析図	95

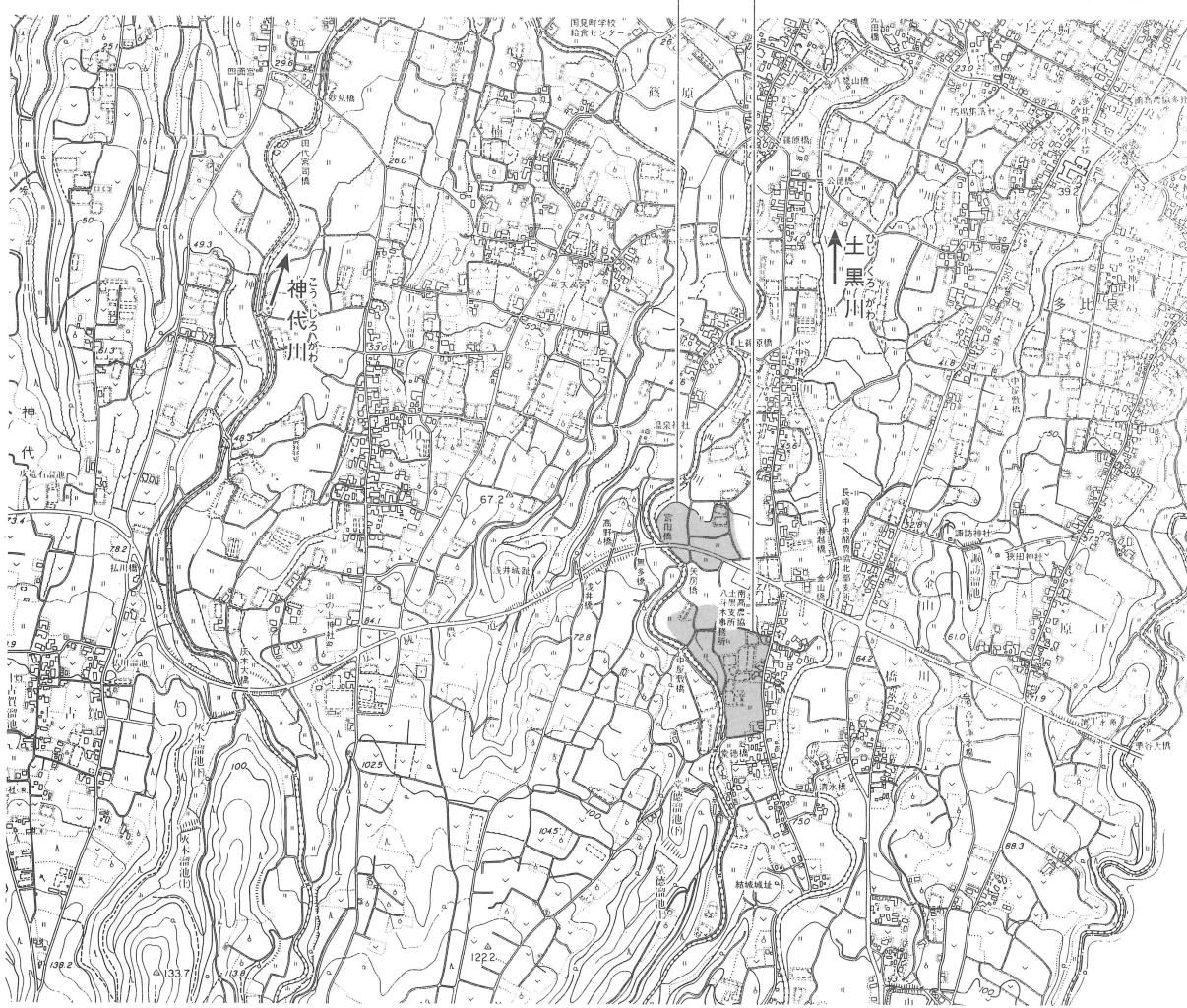
表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧	4
第2表	旧石器時代出土石器計測表	14
第3表	石原遺跡19区 SK02・SD01 出土土器観察表	20
第4表	縄文時代早期土器観察表	27
第5表	縄文時代前期土器観察表	31
第6表	縄文時代晩期土器観察表	34
第7表	石原・矢房遺跡出土縄文時代 石器計測表	38
第8表	矢房遺跡16区住居跡出土土器観察表①	42
第9表	矢房遺跡16区住居跡出土土器観察表②	43
第10表	矢房遺跡16区住居跡出土土器観察表③	44
第11表	石原遺跡8区 Pit01・SK01 出土土器観察表	50
第12表	石原遺跡8区 SK02・24区 SK01, 矢房遺跡4区・12~13区 SD01 出土土器観察表	54
第13表	中世土師器坏・皿法量計測表	59
第14表	掘立柱建物計測表	62
第15表	石器集中地点器種別及び石材別集計表	72
第16表	石器石材分類表	74
第17表	早期壺形土器集成図使用実測図引用ヶ 所一覧	79
第18表	島原半島検出中世土坑	90

図版目次

卷頭図版①	①遺跡遠景 ②旧石器時代の石器 ②石原遺跡10区 SK01 (製鉄炉) ③矢房遺跡中世土坑墓・配石
卷頭図版②	①石原遺跡 旧石器時代遺物出土状況
卷頭図版③	矢房遺跡16区 ①古墳時代中期住居跡 ②古墳時代中期住居跡出土土師器
卷頭図版④	矢房遺跡 9 区 ①中世土坑墓 ②中世土坑墓出土土師器 ③石原遺跡出土墨書・刻書土器
図版 1 遺跡上空写真(昭和35年度国土地理院) 101
図版 2 石原遺跡19区調査風景 102
矢房遺跡14区土層 102
石原遺跡24区土層 102
石原遺跡24区旧石器(AT直上)遺物出土状況 102
石原遺跡22区土層(縄文時代晚期)	102
石原遺跡 a~e 区土層 102
石原遺跡 e 区遺物出土状況 102
石原遺跡 b 区遺物出土状況 102
図版 3 石原遺跡 b 区ナイフ形石器出土状況 103
石原遺跡24区縄文時代早期土器出土状況 103
石原遺跡19区 SD01検出状況 103
石原遺跡19区 SD01遺物出土状況①~④ 103
石原遺跡19区 SD01完掘状況 103
図版 4 石原遺跡19区 SK01検出状況①~③ 104
石原遺跡19区 SK01完掘状況 104
石原遺跡22区 SD01検出状況 104
矢房遺跡16区住居跡検出状況①~② 104
矢房遺跡16区住居跡遺物出土状況① 104
図版 5 矢房遺跡16区住居跡遺物出土状況② 105
矢房遺跡16区土坑墓 105
石原遺跡 8 区 Pit 検出状況 105
石原遺跡 8 区 SK01検出状況 105
石原遺跡 8 区 SK02検出状況 105
石原遺跡 8 区 SK02半載状況 105
石原遺跡 8 区 SK02セクション 105
石原遺跡 8 区 SK02完掘状況 105
図版 6 石原遺跡 8 区 SK02遺物出土状況	106
石原遺跡24区 SK01検出状況①~③ 106
石原遺跡24区 SK01セクション①~②	106
石原遺跡24区 SK01完掘状況 106
石原遺跡24区 Pit 列検出状況 106
図版 7 石原遺跡24区 Pit 列完掘状況 107
矢房遺跡12・13区 SD01検出状況	107
矢房遺跡12・13区 SD01検出状況 107
矢房遺跡12・13区 SD01須恵器出土状況①② 107
矢房遺跡 3 区 SK01検出状況 107
矢房遺跡 3 区 SK01セクション 107
矢房遺跡 3 区 SK01完掘状況 107
図版 8 矢房遺跡 9 区 SK01検出状況①~② 108
矢房遺跡 9 区 SK01遺物出土状況①~② 108
矢房遺跡 9 区 SK01完掘 108
矢房遺跡 9 区 配石 108
石原遺跡19区 SK01検出状況 108
石原遺跡19区 SK01完掘 108

図版 9	石原遺跡10区 SK01①～⑥	109
	石原遺跡20区 SD02①～②	109
図版10	矢房遺跡住居跡と土坑墓	110
	矢房遺跡 9 区土坑墓と配石	110
	石原遺跡 4 区・8～10区 掘立柱建物群	110
	石原遺跡 SB01	110
	石原遺跡 SB03・04	110
	石原遺跡 6 区道路・区画遺構	110
図版11	旧石器時代の石器①	111
図版12	旧石器時代の石器②	112
図版13	石原遺跡縄文時代早期土器①	113
図版14	石原遺跡縄文時代早期土器②	114
図版15	石原遺跡縄文時代早期土器③	115
図版16	石原遺跡 5 区縄文時代前期土器	116
図版17	石原遺跡19区 SD01出土縄文土器	117
	石原遺跡縄文時代晚期土器	117
図版18	石原遺跡出土縄文時代土偶	118
	縄文時代の石器	118
図版19	矢房遺跡16区住居跡出土土器①	119
図版20	矢房遺跡16区住居跡出土土器②	120
図版21	TP 8 土坑出土土器, 石原遺跡 8 区 Pit01出土土器	121
図版22	石原遺跡 8 区 SK01, 8区 SK02出土土器	122
図版23	石原遺跡 4 区・矢房遺跡 9 区 SK01・配石出土土器	123
図版24	石原遺跡10区 SK01・ 古代から中世の特徴的な遺物	124



第1図 石原遺跡・矢房遺跡位置図(1/20,000)

第3節 島原半島の古墳時代住居跡出土土師器

はじめに

島原半島の古墳時代に属する住居跡は、管見で島原市稗田原遺跡、国見町上篠原遺跡・松尾遺跡・矢房遺跡などで検出されている。松尾遺跡では覆土や床面直上から出土した遺物は少ないが、他の三軒からは多数の良好な一括資料が出土している。本稿ではそれらの一括資料について、組成や形態の検討を行い、各住居跡間の前後関係を整理したい。まず、編年の基準となる甕の形態的な特徴を抽出し、各住居跡の相対的な序列を組んでおく。

稗田原遺跡と矢房遺跡出土の土師器甕（第76図）

稗田原遺跡には報告者により2種の甕が存在することが指摘されている。布留式の特徴を残したものと、口縁部が直線的に外反するものがある。報告者の古門氏の分類を参考にし、筆者は次のように整理する。稗田原遺跡で甕の全体像を詳細に知ることはできるのは、報告書37頁第21図①に示している個体（以下「稗田原Ⅰ類」と仮称。第76図左上）である。口縁部は「く」の字に内湾しながら立ち上がり端部が内反し、胴部最大径は中位に位置し、底部は丸底である。外面調整は縦位を主体とした刷毛調整で、肩部から胴部上位にかけて幅広の横ナデにより刷毛目が消されている。内面は肩部に刷毛調整を残しながらも全体にヘラ削りにより器厚が整えられている。稗田原遺跡ではこの他にもう1つの形態（以下「稗田原Ⅱ類」と仮称。第76図右上）がみられる。それは口縁部断面が「く」の字を呈して直線的に立ち上がるタイプのもので、内面は頸部以下がヘラ削り、外面は刷毛調整である。外面に刷毛調整のあと肩部に幅広の横ナデを施す個体も見られる。残念ながら全体像を詳細に知ることのできる個体に恵まれていないが、稗田原遺跡報告書37頁第21図7や39頁第22図17などはその良い例である。上篠原遺跡の甕は全体像を知ることが出来ない個体ばかりであるが、「稗田原Ⅱ類」の範疇に収まるものが主体を占める。

矢房遺跡での特徴的な甕は41頁第40図7（矢房Ⅰ類）と10（矢房Ⅱ類）に示した2種がある。矢房Ⅰ類は頸部の断面幅が広く口縁部になるにつれ薄くなる点が特徴的で、稗田原遺跡出土土師器甕の口縁部形態とは大幅な差が認められる。口縁部の形成技法が異なるためであろう。同様な口縁部は第40図9・10・12第42図19でもみられる。肩部の張りがみられず口縁部は外反し端部がさらに外につまみ出される点が特徴的である。胴部は張りが無く寸胴となり、胴部最大径の位置は非常にあいまいで、底部は丸底である。中位よりもやや上で刷毛調整のプロセスが変化しており、肩部には幅広の横ナデが部分的にみられる。外面下位はリング状に摩滅しており、竈や支脚などの使用が想定できる。内面は肩部付近に指頭によるオサエがみられ、それ以下は横位を主体としたヘラ削りにより器壁が均等の薄さに調整される。

矢房Ⅱ類は頸部内面の稜線が作られないため口縁部と頸部との境界が不明瞭になる。外反する口縁部形態を示し、口縁部端部はⅠ類のように外につまみ上げられ薄くならず、均等な厚さを保っている。体部はほぼ球形で丸底を呈する。外面は胴部に3段階のプロセスで縦位、斜位の刷毛調整が施されたあと、肩部に幅広の横ナデが見られる。内面は全体に刷毛調整を残しており、器壁は矢房Ⅰ類と比べ厚めである。

以上、二遺跡四個体を主として甕の観察を行ったが、形態的な差が大きく、形式的差異を見出すことができるものと思われる。ある程度の年代を知ることができる良好な資料は上篠原遺跡の陶質土器との共伴事例である。この高壙・壺・甕を主体とする陶質土器は日本で開始された須恵器生産直前あるいは直後の形式であると考えられている（註1）。そのため、4世紀末もしくは5世紀初頭という

年代が想定できる。土師器甕に対する分析は近年おこなわれた九州前方後円墳研究会の各地域の編年研究事例で明らかのように、陶質土器段階にはすでに布留式の影響は薄れしており、上篠原遺跡や矢房遺跡にみる甕などが主体となるのであろう。また、矢房Ⅰ類と同様な形態の甕は筑前地方では陶質土器出現よりも新しい段階で出現しており、他地域でも同様である。土師器甕に対するこれらの先行研究を参考にすると、三住居跡間に稗田原遺跡→上篠原遺跡→矢房遺跡というおおまかな相対年代を引き出すことが可能である。

四個体全体に共通する特徴は、胴部全体に刷毛調整が行われた後、頸部下から肩にかけて幅広の横ナデが認められる点である。これは稗田原遺跡例から矢房遺跡例まで通して認められる調整法で、同一系統の技術者集団による継続的な土師器製作が想定される。また、甕内面の調整には刷毛調整が矢房Ⅱ類でも確認されており、特徴的な点である。

先に詳細な観察を加えた土師器甕とは形態的に異なる固体が、試掘調査で確認された甕である（1頁第2図1）。坏と共に伴する個体で、ほぼ完全な形に復元できた。丸く外反する口縁部にやや長い球体を呈する胴部が特徴となる。これを矢房Ⅲ類と仮称しておく。やや胴が長くなる点が特徴的で、他地方では須恵器出現以降にこのような形態の甕が主流となっている。口縁部の形態は上篠原遺跡1号住居跡脇で検出された土師器甕と同系列であるが、胴部形態がこちらの方が長くなり、矢房Ⅰ類に後続するタイプの甕としておきたい。これに共伴する資料は口縁部が内湾する土師器坏である（第2図2～3）。やや深めで口縁部が内湾するこのような坏は、矢房段階に確認されている（第40図2～4）形態である。今後、この形態に類似するような甕を含んだ住居跡出土品などの一括資料の増加が待たれる。

食器組成の変遷（第76図）

ここでは前節で導き出した相対年代を参考に、当地域での食器組成の序列を分析していく。

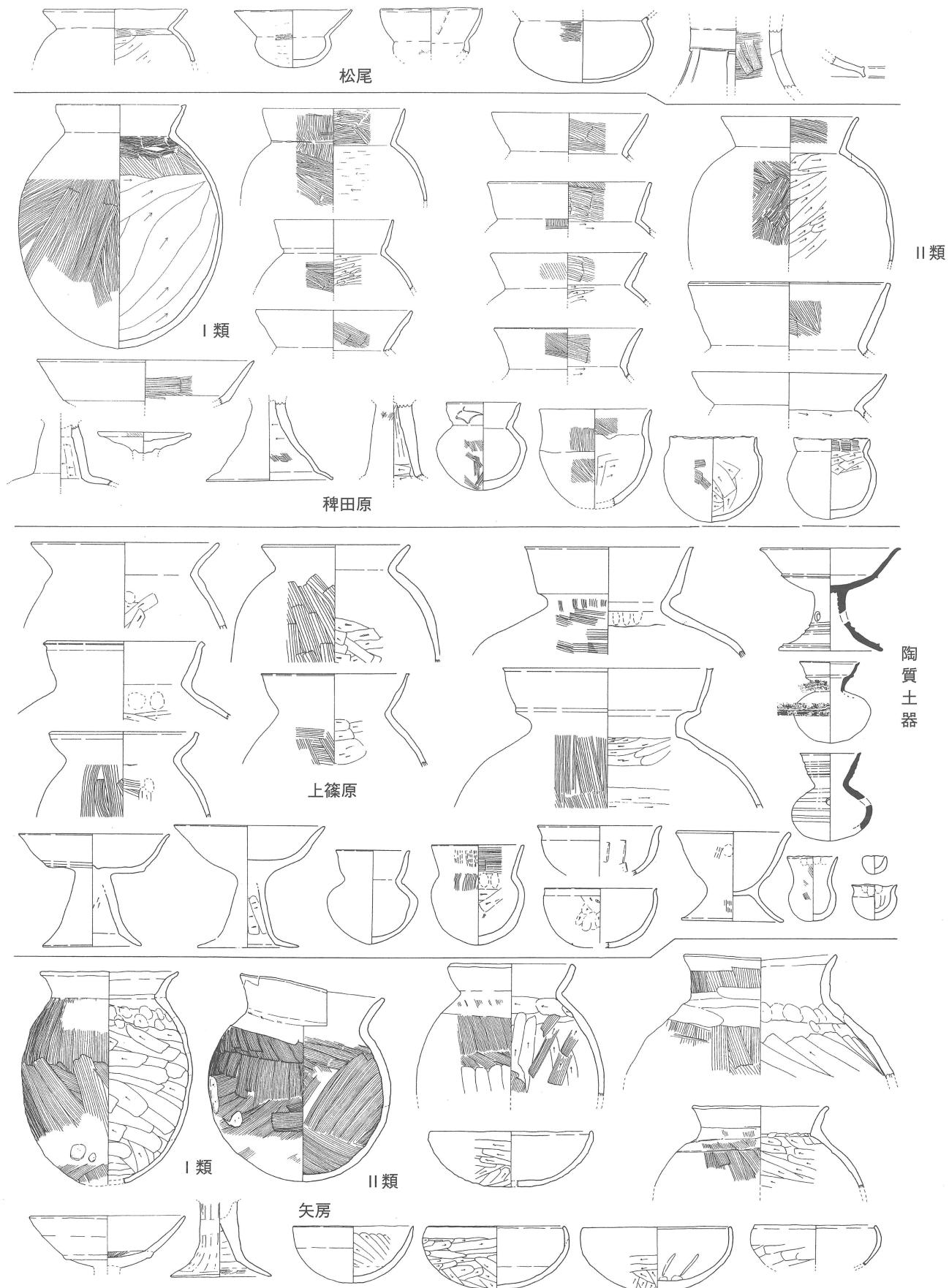
二重口縁壺では島原半島でもっとも古い事例は北有馬町今福遺跡のもので庄内並行期の特徴を有する。後続する二重口縁壺は、稗田原遺跡では確認されず、上篠原遺跡（第76図中段）にある。矢房遺跡では二重口縁壺は破片すら確認されていない。それに対して小型壺は稗田原遺跡（第76図上段）四個体と上篠原遺跡（第76図中段）二個体確認できるが、矢房遺跡ではみられない。次に小型丸底壺であるが、国見町松尾遺跡（第76図上段）で良好な資料がみられるが、他の住居跡では検出されていない。

高坏は稗田原遺跡・上篠原遺跡・矢房遺跡でそれぞれ確認されている。とくに注意すべきは矢房遺跡では高坏が減少している点であろう。高坏に対して、矢房遺跡で坏が増加している。

坏では、端部が内湾するもの（第40図2～4）と外反するもの（第42図16～17）とがあり、稗田原遺跡では坏自体見られず上篠原遺跡と矢房遺跡で確認できる。とくに矢房遺跡では数が多いのが特徴である。坏が量的に増加するのは、筑前地方では陶質土器以降の須恵器出現段階であり、矢房遺跡住居跡出土土器の様相も同様な時期に位置づけられるのであろう。

島原半島での陶質土器出現前後における土師器編年の画期

以上、器種構成に主眼を置いて見てきたが、矢房遺跡にみる①坏の増加と②稗田原Ⅰ類甕・小型壺の消滅は連鎖するものと思われる。この器種組成の変化は画期を設ける為に充分なものであり、「上篠原段階」から「矢房段階」への変化として整理しておきたい。その要因は須恵器の出現を想定しておきたい。



第76図 島原半島検出の住居跡出土土器の様相(1/6)

次に陶質土器の有無を基準として、「稗田原段階」→「上篠原段階」の流れを設定しておく。上篠原段階では布留式の特徴を残す稗田原Ⅰ類は完全に消滅しており、矢房Ⅰ類があらたに加わっている。小型壺の数的減少も加えると、やはり陶質土器出現に際しての器種構成の変革が考えられる。

ここでは「稗田原段階」→「上篠原段階」→「矢房段階」の変遷案を設定したが、古門氏の整理（古門1999）を参考におおよその実年代を想定しておきたい。稗田原遺跡住居跡出土土器群は、布留式新段階（稗田原Ⅰ類）のものが少なくなり、布留式直後型（稗田原Ⅱ類）が主流を占める段階（Ⅲb期）とする。上篠原遺跡住居跡の資料については、Ⅳ期（陶質土器出現）として稗田原Ⅱ類が主体となる段階とする。陶質土器の年代については、5世紀初頭から前半における年代を想定しておく。矢房遺跡出土の矢房Ⅰ類甕は、一野遺跡3号墳周隣出土の一括遺物中に確認され、5世紀後半代の須恵器蓋坏や多数の土師器坏と共に伴している。須恵器は2形式ほどに分類できるが、いずれにしても5世紀第3四半期～第4四半期に属する資料である。この点を考慮すると矢房遺跡住居跡一括出土の土器群に対しては、一野遺跡3号墳と同様な年代観を設定しておきたい。すなわち陶質土器出現段階（上篠原段階）に後続する段階である。

矢房段階に後続する良好な住居跡出土資料は管見ではみられないが、石原遺跡試掘調査で得られた甕矢房Ⅲ類（第2図）や上篠原遺跡住居跡脇出土の甕などは、後続する特徴を有する土器群と考えておきたい。土師器坏についても、須恵器模倣坏の存在を示しておきたい。島原半島での出土は未だ少ないが、島原市景華園遺跡や一野古墳群で出土しており、須恵器出現以降の器種構成の重要な要素として島原半島においても、6世紀代食器組成のなかで重要な位置を占めているものと思われる。

また今回の整理では筑前地方の成果を援用しているが、島原半島と筑前・筑後地方との地域差を考慮しておかねばならないであろう。筑前・筑後地方の文化的な波がダイレクトに島原半島へ同時期に到達することは証明できていないため、そのあたりの時間的なずれを考慮する必要がある。

おわりに

島原半島における古墳時代住居跡出土土師器の整理を試みた。各住居跡の一括資料を観察し、5世紀代の土器群に対するある程度の序列が提出できたのではないだろうか。特に陶質土器の登場や須恵器出現を契機として、食器組成が大きく変化している点を指摘できたかと思う。今後、資料の増加により住居跡の構造や生活様式の復元、あるいは前期や後期に属する土器群についてもその変遷を追及できればと期待している。

（竹中）

（註1） 中村浩編1988 季刊考古学第24号（巻頭「初期の須恵器」写真参考）

参考文献

- 諫見富士郎1988『上篠原遺跡』概要報告書 長崎県立国見高等学校考古学研究部
古門雅高1997「⑧有明海西部地域の古式土師器」「稗田原遺跡Ⅰ」（村川逸朗編）長崎県文化財調査報告書 第136集 長崎県教育委員会
古門雅高1999. 4 「黄金山古墳出土土師器の検討」西海考古創刊号 西海考古同人会（長崎県）
宇土靖之・竹中哲朗2001『一野遺跡Ⅱ』有明町文化財調査報告書 第14集 長崎県有明町教育委員会
辻田直人・竹中哲朗2002『松尾遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第2集 長崎県国見町教育委員会
前方後円墳研究会2002『古墳時代中・後期の土師器—土師器の編年と地域性—』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨

第4節 古代の土坑

遺構の検出状態

第6章で紹介してきた遺構にはその出土品の状態から、以下の2種に分類できる。

① 完形品の土器を出土した土坑：石原遺跡8区 Pit01（45頁第44図）

8区 Pit01では長軸55cmほどの楕円形の土坑から、土師器壺が蓋と身が合わせられた状態で、その傍らに須恵器小壺が置かれた状態で検出されている。土師器壺には蓋と身ともに切込みが焼成後に入れられており、「口」を作り出している。出土状態では蓋の口と身の口とは正反対の方向を向いた状態で出土している。土師器・須恵器ともに土坑中央には位置せず、斜面に寄りかかるような状態で出土している。

② 土器の破片・破損品を出土した土坑：石原遺跡8区 SK01（46頁第45図）・SK02（48頁第47図）

8区 SK01では長軸1m88cm短軸1m18cmという不正方形の土坑から多数の土師器が出土している。土坑内部でも破片の大きさが異なり、完全な形で出土した第46図3が位置する土坑南側では比較的大きな破片が多い。第46図3以外は破片での出土である。須恵器も同様に破損した状態で出土しており、8区 Pit01とは様相が異なっている。

8区 SK02では深さ約65cm、径1m50cmほどの不正円形を呈しており、土器片はその上部から出土している。重要な点は北側から一気に土坑内部に土砂とともに廃棄された状態であり、土坑の掘削が行われて、それほど時間を経ない段階で廃棄されたものと考えられる。そのため SK02については、廃棄のために掘られた土坑とも考えられるのである。完形品の土器は第47図1・2に示す土師器壺のみで、他は大小の破片資料である。土坑内部に含まれる土器片は廃棄される前段階で、破片となっていた可能性も考えられる。

石原遺跡ではこのように二種の出土状態が確認されており、②については土坑を埋める際に土器片などを一緒に廃棄した「廃棄土坑」として理解しておきたい。①についてはその出土状態から、「埋納土坑」と理解しておきたい。

類例の比較・検討

南高来郡有明町大野原遺跡では今回報告した土坑とは異なる検出状態の遺構が報告されており、出土品も豊富である。出土品について接する機会を得たので比較・検討を行っておきたい。

③ 膨大な量の完全な形に近い土器を多数出土した土坑：大野原遺跡七反畠地区B4拡張区検出「廃棄土坑」（註1）

検出面の直径約1m50cmの円形土坑で、深さ約1m、底径約1mをはかる。土坑や出土品の写真図版などから、ほぼ完全な形で放り込まれた土器（須恵器・土師器）が多く、破片資料も合わせた総数は二千点を超えるという。また土器のほかに「刀子状鉄製品」2点、鹿1体分（ただし角は1本のみ）の骨が検出されている。さらに概報では土坑覆土はいくつかの層に分類できたようであるが、その詳細は明記されていない。第77図は概要報告で紹介されている土坑出土土器の主なものである。また、概報では土坑出土品であるのか・層位出土品であるのかが明記されないままに紹介されているために、土坑内部での相対的年代を層位から分析することができない。概要報告のみであるため、本報告が待たれる。出土品中には同一形式の範疇に収まらない資料が多いと思われ、廃棄されたすべての土師器・須恵器が同一時期を示しているとは考えがたい。

さて、このような状態は上記①や②とは異なる状態である。報告者は土坑周縁にみられる小ピット群や土器の出土状態から、二千点を超える膨大な食器類を一括廃棄した「廃棄に関わる祭祀坑」とし

ている。この観察は示唆的であるが、形式的に差をみせる二千点を越える土器群を一括に廃棄した点を筆者は強調しておきたい。石原遺跡で見られる①や②の状態とは明らかにことなる行為であって、古代に行われた土器群の廃棄について重要な示唆を与えてくれる出土状態である。

出土品の構成

以上3種の状態の古代土器群が存在するのであるが、これらに対して形式学的な検討を行い、その出土状態の検証を進めていきたい。まず、それぞれの遺構出土土器の構成を整理していきたい。

8区 Pit01：土師器坏身・蓋 須恵器小型壺

8区 SK01：土師器坏片（無蓋）、甕片 須恵器坏片

8区 SK02：土師器蓋（宝珠つまみ・環状つまみ）、土師器甕片 須恵器鉢片

大野原遺跡七反畑土坑：土師器坏身・蓋、皿、高坏、盤、鉢、甕、甕片

須恵器坏身・蓋（環状つまみ）、皿、高坏、鉢、甕

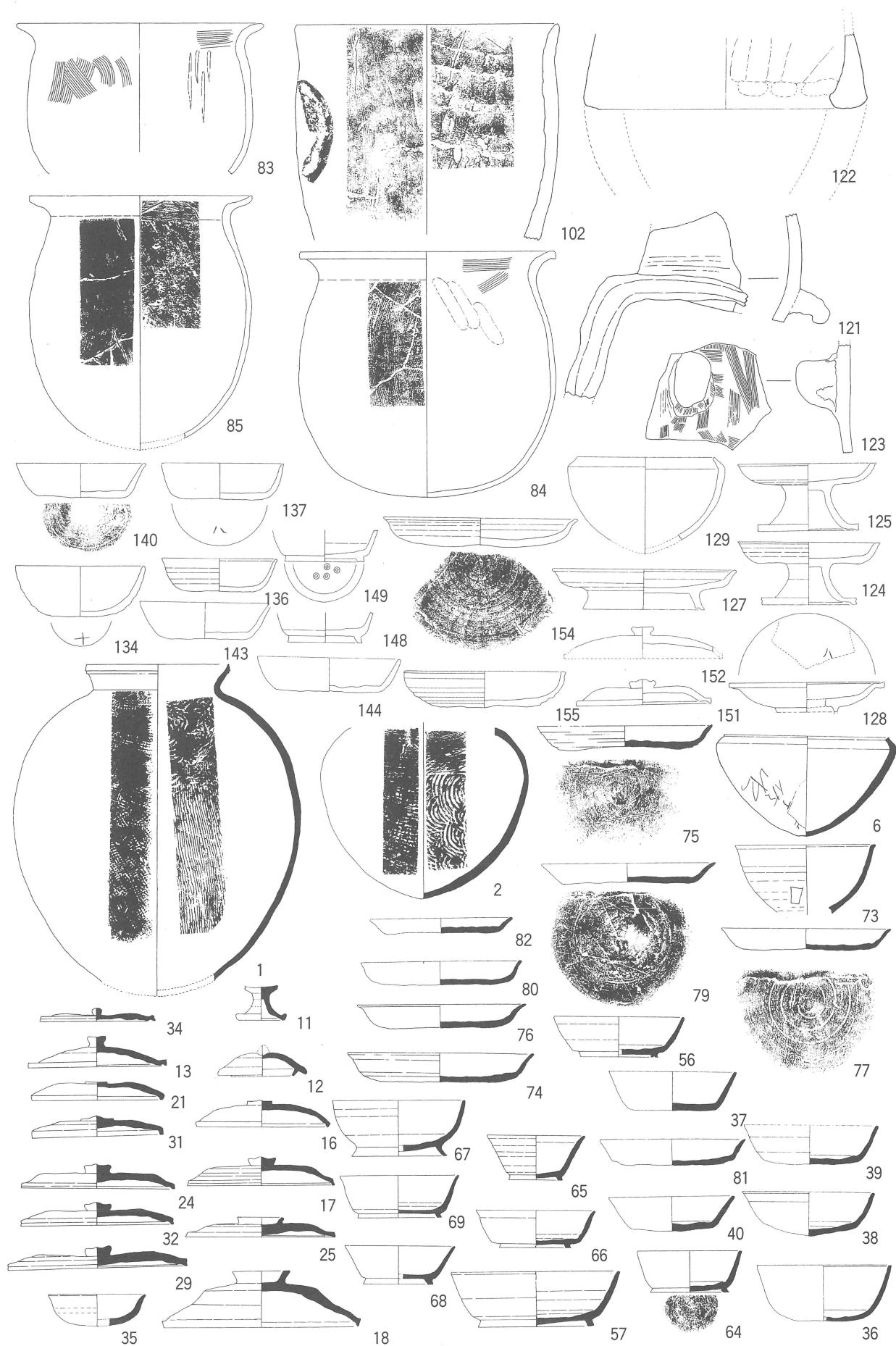
やはり圧倒的に大野原七反畑遺跡土坑出土品では器種が豊富で、石原遺跡の土坑出土品は坏と甕などに限られる。大野原七反畑遺跡土坑出土品は、一住居跡（生活単位）一括出土品をはるかに越える量と思われる。そのため、継続的に土器を廃棄していたのか、ほかの場所で収集したものも一括で廃棄したのかの解釈が重要なポイントとなろう。また、刻書された土器もあり、官人層や知識人の存在を示している。

ま と め

島原半島で検出されている古代の土坑について出土状態を主眼に3種を整理した。いずれも土坑の所属する集落の性格あるいは集落内部での位置に大きく反映しているものと考えられる。各遺跡内部での遺構配置などの整理を踏まえて、それらの土坑について再論していきたい。また、相対年代を導き出す良好な資料となっているが、筆者の力量不足のため、本概報ではそこまで整理できなかった。今後、稿を改めて形式的な変遷を整理していきたい。

（竹中）

（註1）諫見富士郎1993. 5『概要報告書 大野原七反畑遺跡』有明町文化財報告書 第10集 長崎県有明町教育委員会



第77図 大野原遺跡・七反畝地区廃棄土坑出土遺物(1/6)

まとめ

89

第5節 矢房遺跡検出の中世土坑墓

今回の調査では中世の土坑墓（付属配石も含む）と思われる遺構（56頁第56図）から土師器坏6点が良好な状態で出土しており、一括遺物としての評価は高い。この土坑について若干整理してみる。島原半島における同様な土坑として管見では第18表にあげた4遺跡5遺構がある。遺物の出土が少ない点もあり、詳細な時期の検討はできない。ここではまず、構造的側面から整理していく。

平面プラン

平面プランについて諫早市林ノ辻遺跡を除いて、隅丸長方形である。しかし、規模は一定ではなく、特に猪之瀬遺跡の土坑は長軸2.4m短軸1.6mと幅・長さともに他よりも群を抜いている。猪之瀬遺跡を除くと、幅が60cmから70cmの間に収まり、長さは80cmから1.3mとやや開きがある。猪之瀬遺跡では底面隅にピットが多数検出されており、構造的にも他4遺構とはかけ離れたものと思われる。

主軸方位

主軸方位については同一遺跡内である今福遺跡の二例に3度の開きがあるが共通している。異なる遺跡間では矢房遺跡と今福遺跡が9から6度の差をとり主軸は共通する様子であるが、猪之瀬遺跡のみは他4遺構とは異なる軸を持っている。

上部構造

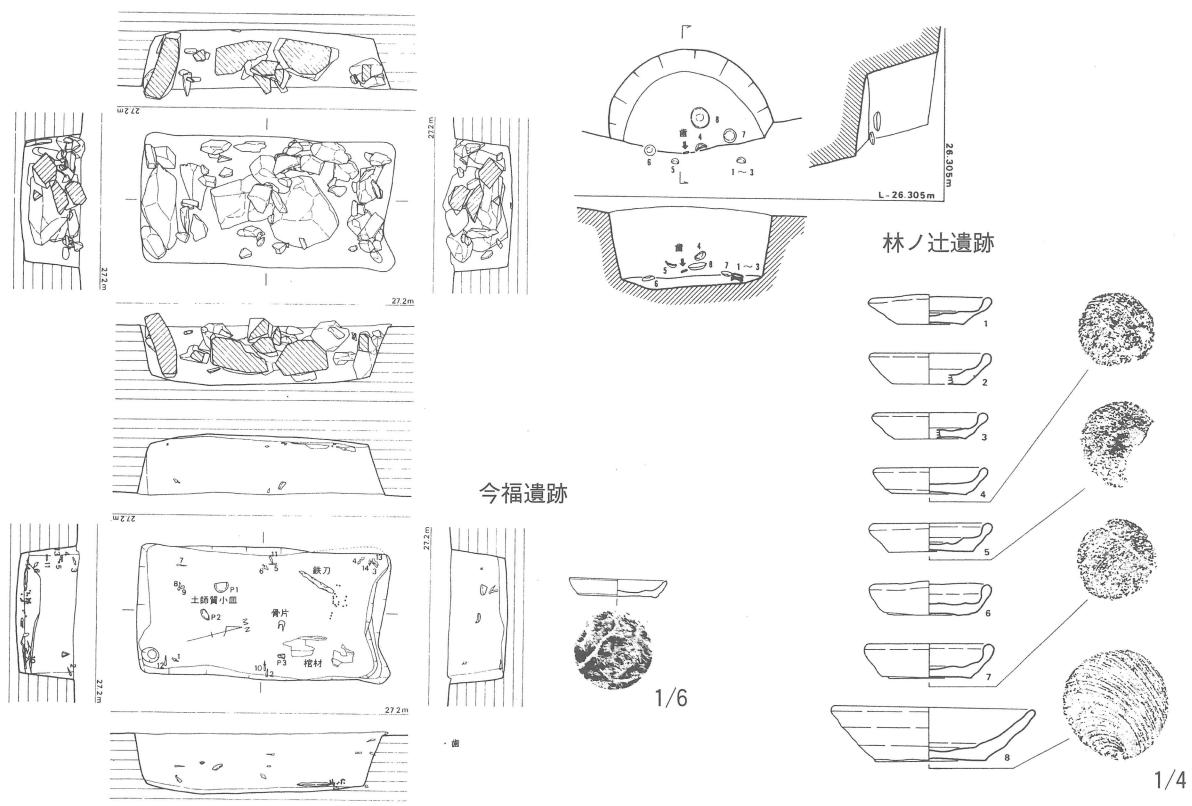
上部構造については覆土観察により、林ノ辻遺跡以外の4遺構で人頭大以上の礫が土坑上面あったことが復元されている。礫の大きさでは今福遺跡の場合がもっとも大きく90センチ大の礫を木棺上面においていたことになり、礫の重量と木棺の耐重量とに開きがあることが予想される。礫と出土遺物の関係では礫直下に土師器皿や青磁片が出土している場合がほとんどであり、矢房遺跡では土師器皿はほぼ破損することなく土坑中に落ち込んだ状態で出土しており、徐々に土坑中に落ち込んでいったとかんがえておきたい。

第18表 島原半島検出中世土坑

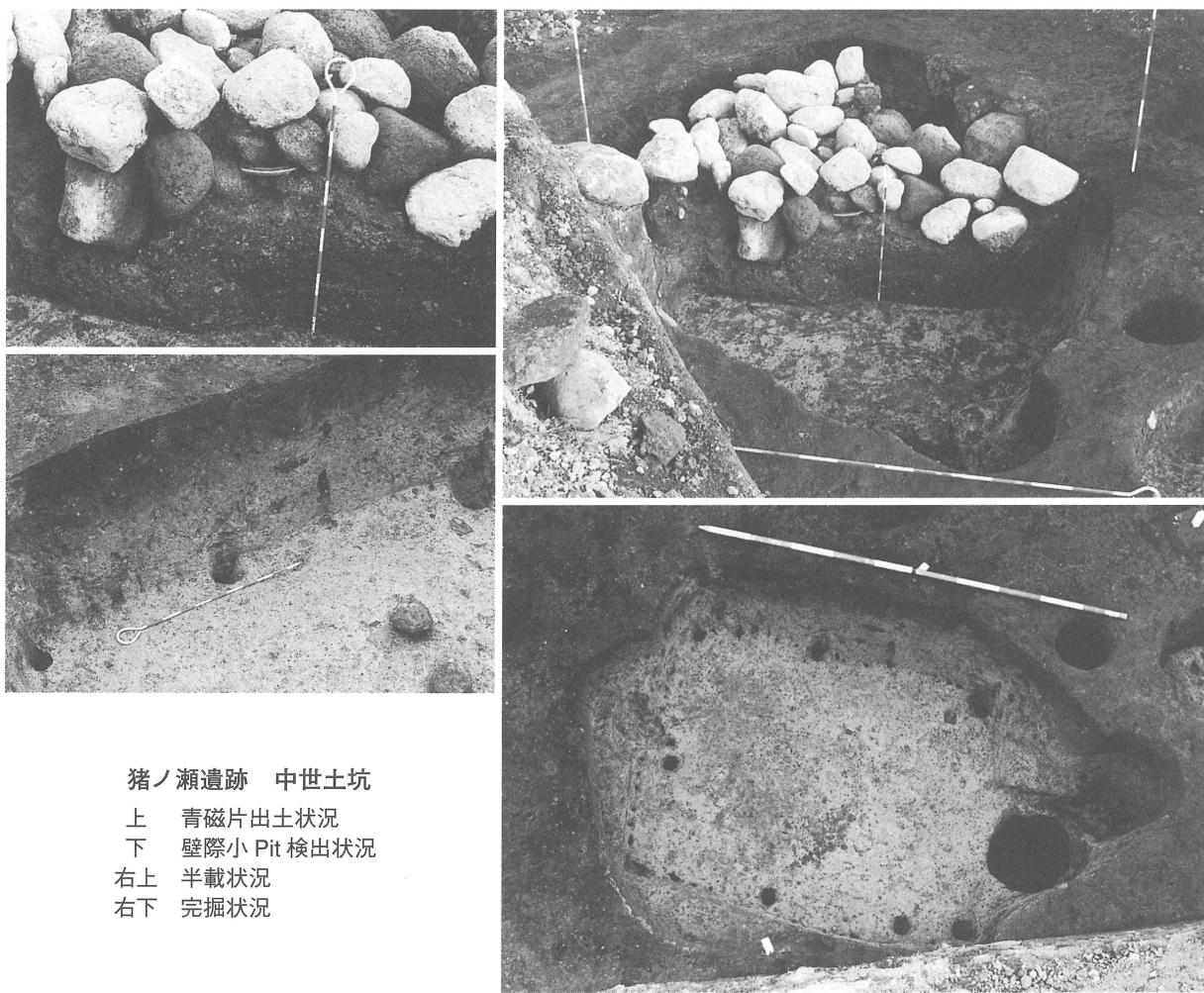
遺跡	所在地	遺構	平面プラン	主軸方位	上部構造	出土状態と遺物
矢房遺跡	南高来郡国見町 石原名字矢房	9区SK 01	隅丸長方形 0.83×0.68	N-8度-W	人頭大礫多数	礫直下より 土師器皿5点
猪之瀬遺跡	南高来郡国見町 金山名字猪之瀬	土坑	異形方形 2.4×1.6	N-65度-W	拳大～人頭大礫 多数	礫直下より 青磁片（碗・盤）
今福遺跡	南高来郡南有馬町今福名	1号木棺	隅丸長方形 0.95×0.59	N-17度-W	90センチ大～人頭大 礫	礫直下より 木棺一部・歯冠
		2号木棺	隅丸長方形 1.3×0.68	N-14度-W	90センチ大～人頭大 礫	歯冠・骨片・鉄刀・土 師器皿・須恵鉢片・鉄
林ノ辻遺跡	諫早市小川町	2号円形 土坑	円形 径0.9	-	礫などは検出さ れず	底面より浮いた状態 土師器皿7点、歯冠

出土遺物の構成

出土遺物は矢房遺跡で土師器皿5点、猪之瀬遺跡で青磁片（碗・盤各1点）、今福遺跡では歯冠、木棺、鉄刀、鉄釘、土師皿片、須恵鉢片、林ノ辻遺跡では土師器皿7点、歯冠となっている。猪之瀬遺跡の青磁片を除いて、土師器皿複数の出土が特徴的である。特に矢房遺跡では付属すると考えられる配石の脇に土師器皿1点が添えられており、土坑墓には欠かせない器であったことが想定できる。その点数は矢房遺跡では土坑5点・配石1点、林ノ辻遺跡では土坑内に7点出土している。



第78図 今福遺跡2号木棺・林ノ辻遺跡2号土坑(1/40)



猪ノ瀬遺跡 中世土坑

- 上 青磁片出土状況
- 下 壁際小Pit検出状況
- 右上 半載状況
- 右下 完掘状況

まとめ

上記4点について整理を行ってきたが、青磁片を出土している猪之瀬遺跡の土坑は他の4遺構とは格別の差を持っていることが抽出できたかと思われる。また、歯冠や木棺片・鉄釘などが出土している今福遺跡例との比較から、矢房遺跡や猪之瀬遺跡などの土坑も墓と分類してもよいと考えられる。規模から猪之瀬例は、成人伸展葬が可能で、他は難しい。矢房例は、幼児のものと考えておきたい。

時期的な検討を加えるならば、猪之瀬遺跡で出土している青磁碗・盤は15から16世紀の時代が与えられている。他の遺跡では、糸切り痕跡を底部に残す土師器皿により各報告者によって中世という時期が与えられているに過ぎない。今後、土師器に対して技法的な側面とともに、法量的な分析を検討していくかねばならないであろう。そのような手続きを踏んだ上で、今回検討した要素について、今後整理を行っていきたい。

(竹中)

各遺跡の関連文献

矢房遺跡：辻田直人2001. 12「国見町矢房遺跡一括出土遺物について」『西海考古 第4号』 西海考古同人会（長崎県）

猪之瀬遺跡：辻田直人2000「国見町猪之瀬遺跡の集石および小ピットを伴う土坑について」西海ニュース第19号 西海考古同人会（長崎県） 93P 第79図は再トレース 91P 写真は今回初出

今福遺跡：宮崎貴夫・町田利幸1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会
林ノ辻遺跡：秀島貞康1983『林ノ辻遺跡』諫早市文化財調査報告書第4集 長崎県諫早市教育委員会

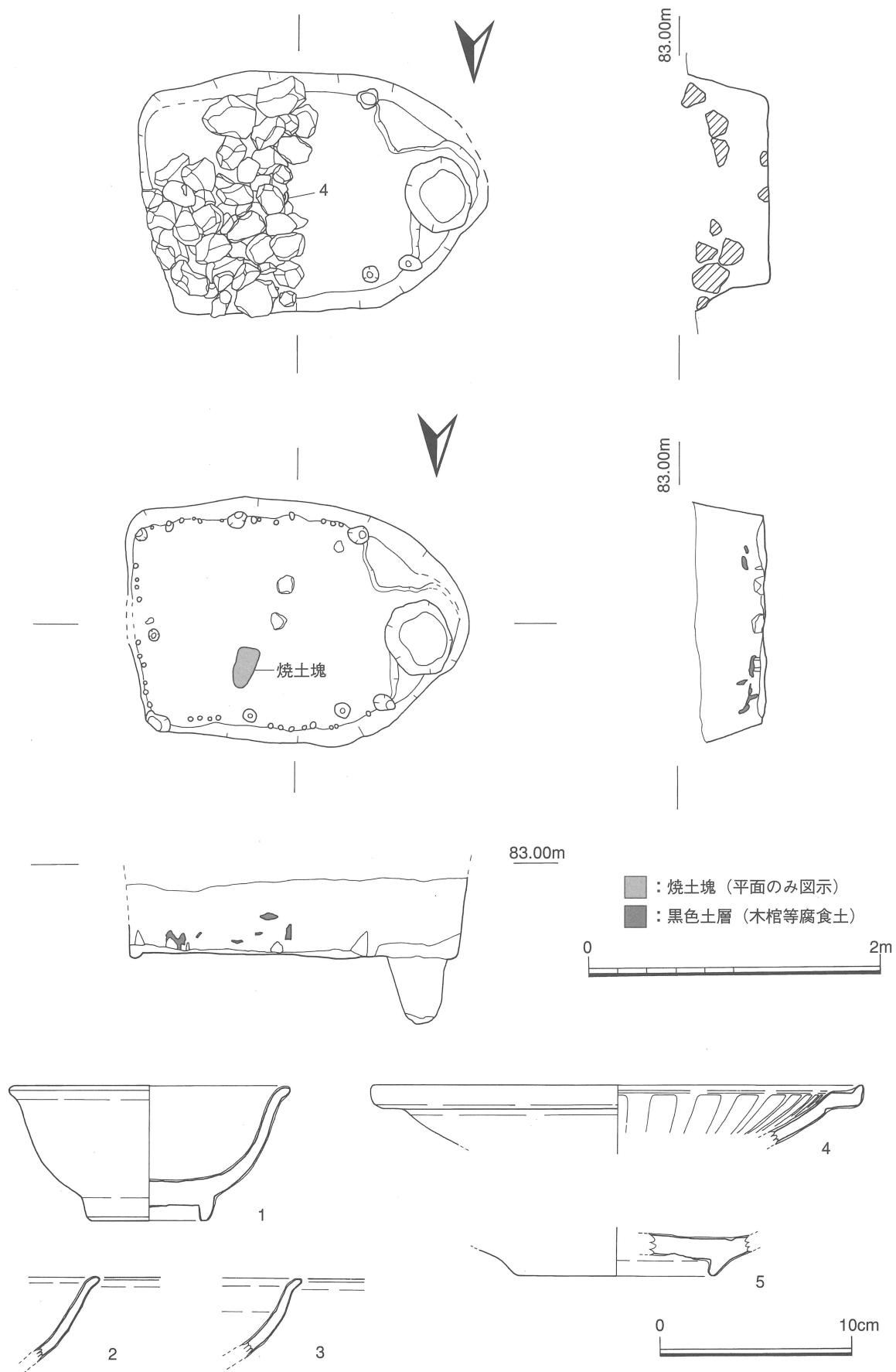
一猪之瀬遺跡検出の土坑について一

土坑は遺跡東側の平坦部分で検出された。長さ約1.8m、幅約1.6mの隅丸長方形をなし、深さは約0.6mを測る。平に掘削された土坑床面周囲には、直径2～5cm程の小ピットが規則的に並び、壁周には、小ピットに差し込んでいたと思われる杭痕が残る。また、土坑中央部には被熱痕が検出された。土坑東側に張出した部分は、先行する掘りこみで、土坑西側の柱穴は、後世のものである。覆土は、土坑底から約20cmの高さまで暗黒色土および遺構掘削層の黄色土が混ざり合ったもので、その上部には直径15cm程の礫が集中して検出された。礫を除去すると、その直下に押しつぶされるように青磁碗口縁部2点、器形復元可能な青磁碗1点、青磁盤口縁部1点が出土している。また、礫上部より鉄釘状遺物も1点出土している。（91P写真参照）

1～3は外面に文様を持たず口縁部の外反するタイプの青磁碗で、口径15cm、器高7cm、底径7cmを測る。上田秀夫氏の分類によれば14世紀後半から15世紀前半の時期が考えられる。4は底部を欠損する青磁盤で、口径25.6cmを測る。大きく開いた胴部からさらに口縁部を「く」の字に開き、口縁端部を上方に引き上げる。内面には幅約1.2cmの蓮弁文を有する。盤の形式編年は今のところ殆どなされていないが、北有馬町の日野江城でこれとほぼ同等のものが出土しており「15～16世紀を想定している」とされている。5は表採遺物だが青磁盤の底部と考えられ、4と同一固体か。

覆土の状況から、礫は土坑への投棄等ではなく、木棺の上部に積み上げていたものが、木棺の腐食崩壊により落ち込んだものと想定できる。遺物は礫層直下から出土しており、木棺の蓋の上に置かれていたものであろう。これに類似する木棺墓は、太宰府編年I-5b相当の完形の蓮弁文青磁碗を出土する松浦市櫻楷田遺跡、12～13世紀の土師質土器を出土する北有馬町今福遺跡で検出されているが、どちらも、遺物は木棺の内部に副葬されている点が異なる。また、床面の周囲に小ピットを持つ木棺墓は、県内いずれの遺跡からも検出例はないようである。

（辻田2000より）



第79図 猪之瀬遺跡土坑・出土遺物実測図(1/40・1/3)

第9章 自然科学分析

国見町、石原遺跡の火山灰分析及び年代測定

株式会社 古環境研究所

I. 石原遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

九州地方北部島原半島に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、雲仙、阿蘇、姶良、鬼界などの火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで年代が不明な石器が検出された国見町石原遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象に火山ガラス比分析と屈折率測定を行い、遺物包含層の層位や年代に関する基礎的な資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、24区東壁である。

2. 土層の層序

24区東壁では、下位より若干黄色がかった褐色土（層厚15cm以上、XII層）、炭化物を含む亜角礫混じり暗褐色土（層厚35cm、XIb層）、若干黄色がかった褐色土（層厚12cm、XIa層）、黒褐色土（層厚16cm、X層）、灰色岩片に富む暗褐色土（層厚15cm、岩片の最大径3mm、IX層）、黒色土（層厚19cm）、暗褐色土（層厚19cm、以上VII層）、黄褐色土ブロック混じり灰褐色土（層厚16cm、VII層）、若干暗い灰褐色土（層厚18cm、IV層）、暗灰褐色土（層厚11cm、IIIb層）、灰色砂礫層（層厚27cm、礫の最大径43mm）、亜円礫混じり暗灰色土（層厚3cm、III層）、亜円礫混じり暗灰色土（層厚10cm、礫の最大径11mm）、若干黄色がかった灰色土（層厚13cm）、灰褐色土（層厚17cm）、角礫層（層厚23cm、盛土）、灰褐色作土（層厚36cm、盛土）が認められる（図1）。発掘調査では、これらの土層のうち、XIb層の最下部から石器が検出されている。

3. 火山ガラス比分析

(1) 分析方法

24区東壁において、基本的に厚さ5cmごとに採取された試料のうち19点を対象として、火山ガラスの色調・形態別比率を求める火山ガラス比分析を行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄を行い、泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥装置により乾燥(80°C)。
- 4) 分析篩により、1/4 - 1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を検鏡し、火山ガラスの色調・形態別比率を求める。

(2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図2に、火山ガラス比の内訳を表1に示す。試料27と試料23を除くいずれの試料からも火山ガラスを検出することができた。また試料33, 27, 23, 17を除くいずれの試料からも、無色透明のバブル型（平板状）ガラスが検出された。

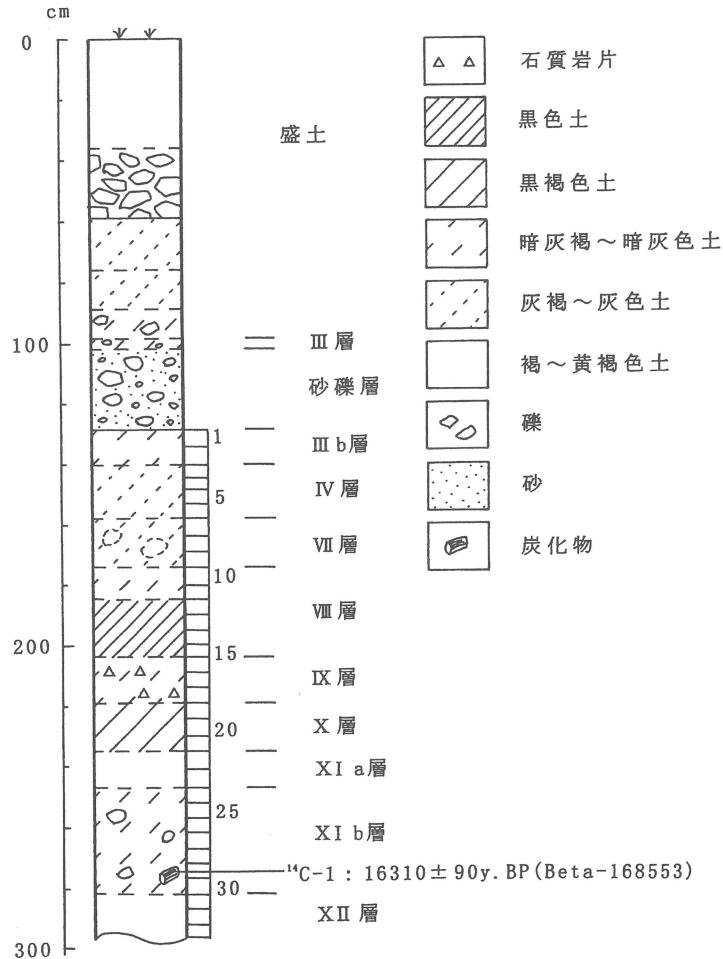


図 1 24区東壁の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

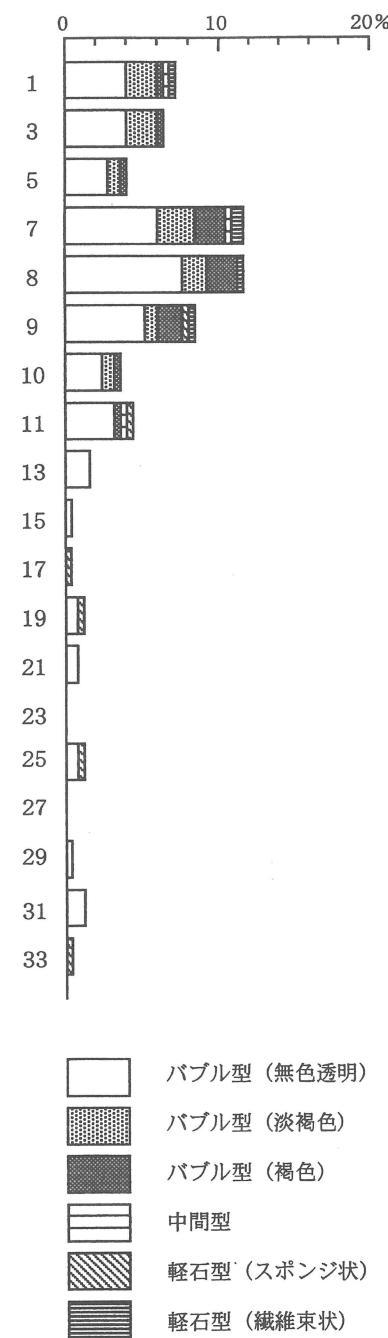


図 2 火山ガラス比ダイヤグラム

第80図 自然科学分析図

火山ガラスは、とくに試料8や試料7に多く含まれている。いずれの試料にも、無色透明のバブル型ガラスのほかに、淡褐色や褐色のバブル型ガラスが多く含まれている。その産状から、試料8付近に、これらのバブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準のある可能性が非常に高い。

なお、それより下位の無色透明のバブル型ガラスについては、とくに顕著な濃集層準は認められない。少なくとも試料31以下の層位に、無色透明のバブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準のある可能性が考えられる。

4. 屈折率測定

(1) 測定方法

火山ガラス比分析によりテフラの降灰層準のある可能性が指摘された試料8と、無色透明のバブル型ガラスが検出された試料31の2試料について、日本列島とその周辺のテフラ・カタログ作成にも利用された温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）により、屈折率の測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表2に示す。下位の試料31に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.499–1.501である。重鉱物としては、角閃石のほか、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。また酸化した角閃石も、わずかに認められる。試料8に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.509–1.514 (modal range: 1.510–1.512) である。重鉱物としては、角閃石のほか、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。

5. 考 察

試料31(XII層)に含まれる火山ガラスは、形態や色調さらに屈折率などから、約2.4~2.5万年前¹⁾に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 村山ほか, 1993, 池田ほか, 1995）に由来する可能性が高い。また試料8(VII層)に含まれる火山ガラスは、形態や色調さらに屈折率などから、約6,300年前¹⁾に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 町田・新井, 1978）に由来すると考えられる。以上のことから、試料31以下に降灰層準があると考えられるテフラはAT、また試料8付近に降灰層準のあると考えられるテフラはK-Ahと推定される。したがって、24区においてXlb層最下部から検出された石器の層位については、ATより上位で、K-Ahより下位にあると考えられる。このことは、石器検出層準の炭化物の放射性炭素(¹⁴C)年代（後述）とも矛盾しない。

6. ま と め

石原遺跡24区において、地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定を行った。その結果、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 約6,300年前¹⁾）のほか、その下位から始良Tn火山灰（AT, 約2.4~2.5万年前¹⁾）に由来する可能性が高い火山ガラスが検出された。本遺跡で検出された石器の層位については、ATより上位で、K-Ahより下位にあると考えられる。

* 1 放射性炭素(¹⁴C)年代。

文献

- 新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254–269.

新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法－研究対象別分析法」, p. 138–148.

池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火碎流中の炭化樹木の加速器質量分析法による¹⁴C 年代. 第四紀研究, 34, p. 377–379.

町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰－始良 Tn 火山灰の発見とその意義. 科学, 46, p. 339–347.

町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p. 143–163.

町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良 Tn 火山灰 (AT) の¹⁴C 年代. 第四紀研究, 26, p. 79–83.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 (1993) 四国沖ピストンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の¹⁴C 年代. 地質雑誌, 99, p. 787–798.

表1 火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
24区東壁	1	10	5	1	1	0	1	232	250
	3	10	5	1	0	0	0	235	250
	5	7	2	1	0	0	0	241	250
	7	15	6	5	1	0	2	221	250
	8	19	4	5	0	0	1	221	250
	9	13	2	4	0	1	1	229	250
	10	6	3	1	0	0	0	240	250
	11	8	0	1	1	1	0	239	250
	13	4	0	0	0	0	0	246	250
	15	1	0	0	0	0	0	249	250
	17	0	0	0	0	1	0	249	250
	19	2	0	0	1	0	0	247	250
	21	2	0	0	0	0	0	248	250
	23	0	0	0	0	0	0	250	250
	25	2	0	0	0	1	0	247	250
	27	0	0	0	0	0	0	250	250
	29	1	0	0	0	0	0	249	250
	31	3	0	0	0	0	0	247	250
	33	0	0	0	0	1	0	249	250

数字は粒子数. bw : バブル型, md : 中間型, pm : 軽石型, cl : 透明, pb : 淡褐色, br : 褐色, sp : スポンジ状, fb : 繊維束状.

表3 24区東壁における屈折率測定結果

試料	火山ガラス (n)	重鉱物
8	1.509–1.514 (1.510–1.512)	ho>opx,cpx
31	1.499–1.501	ho>opx,cpx (oxy-ho)

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による。()は、modal range を示す。oxp：斜方輝石，cpx：单斜輝石，ho：角閃石，oxy-ho：酸化角閃石黒雲母。重鉱物の()は、量が少ないことを示す。

II. 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定結果

1. 試料と方法

地点	試料	種類	前処理・調整	測定法
24区東壁	$^{14}\text{C}-1$	炭化物	酸洗浄・石墨調整	加速質量分析(AMS)法

2. 測定結果

試料 (年BP)	^{14}C 年代 (%)	$\delta^{13}\text{C}$ (年BP)	補正 ^{14}C 年代	暦年代(西暦)	測定No (Beta-)
$^{14}\text{C}-1$	16340 ± 90	-27.1	16310 ± 90	交点：BC 17500 1 σ ：BC 17910～17100 2 σ ：BC 18020～17000	168553

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際慣例に従って5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PD-B)の同位体比からの千分偏差(%)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代(西暦)。補正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40 (3))により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ (68%確率)・ 2σ (95%確率)は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

図版



遺跡上空写真（昭和35年度国土地理院）

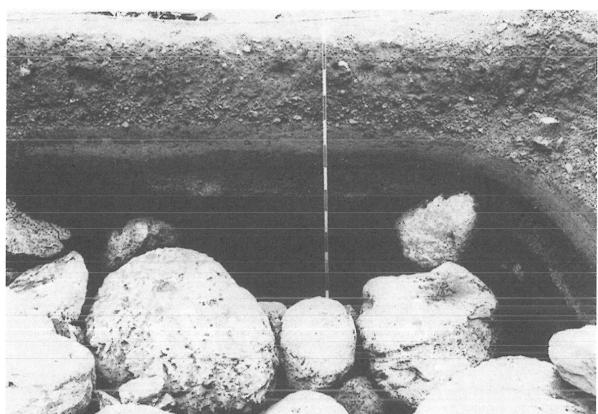
図版 2



石原遺跡19区調査風景



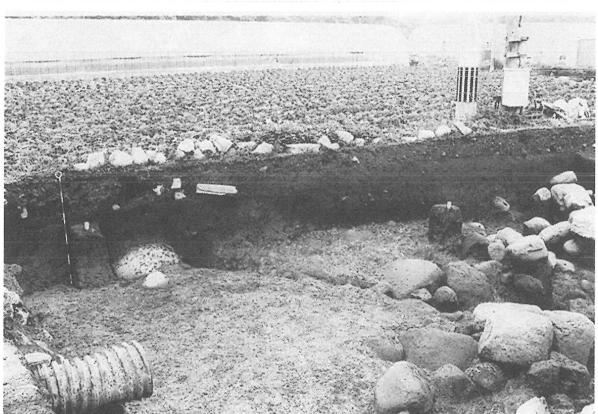
矢房遺跡14区土層



石原遺跡24区土層



石原遺跡24区旧石器(AT直上)遺物出土状況(本文8)



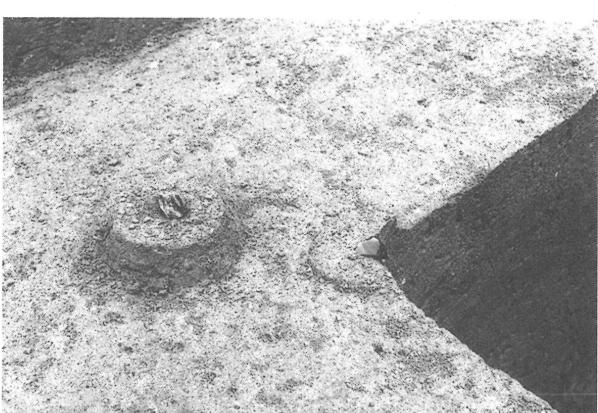
石原遺跡22区土層（縄文時代晩期）



石原遺跡 a~e 区(19~20区)土層(旧石器)(本文10~14)



石原遺跡 e 区遺物出土状況(旧石器)



石原遺跡 b 区遺物出土状況(旧石器)



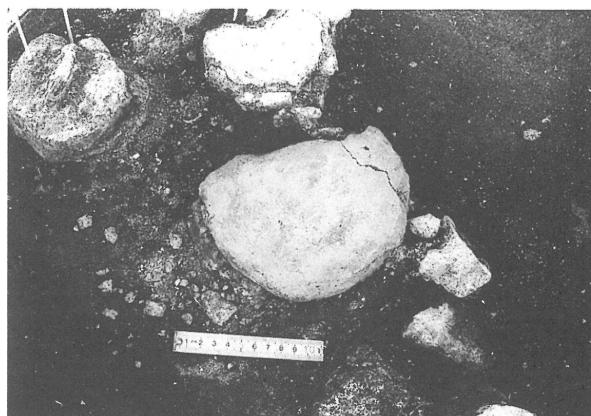
石原遺跡 b 区ナイフ形石器出土状況（本文10～14）



石原遺跡24区縄文時代早期土器出土状況（本文21）



石原遺跡19区 SD01検出状況（本文17～18）



石原遺跡19区 SD01遺物出土状況①



石原遺跡19区 SD01遺物出土状況②



石原遺跡19区 SD01遺物出土状況③

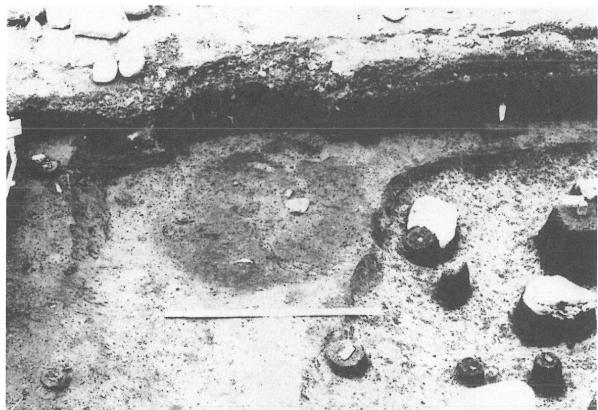


石原遺跡19区 SD01遺物出土状況④



石原遺跡19区 SD01完掘状況

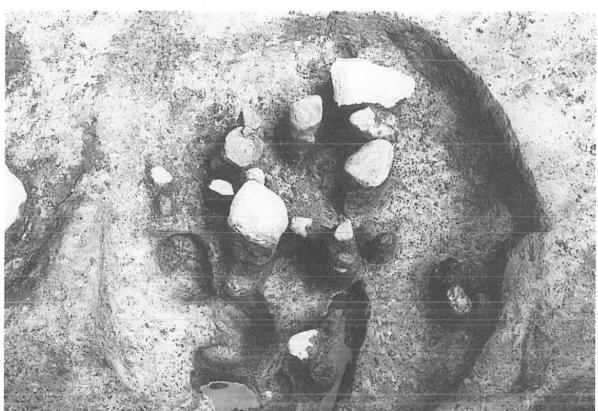
図版 4



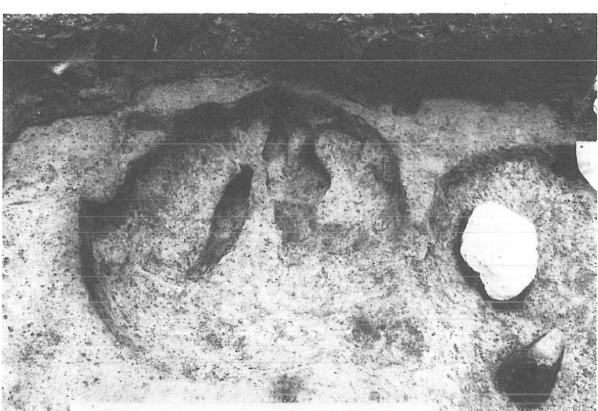
石原遺跡19区 SK01検出状況① 西より（本文15）



石原遺跡19区 SK01検出状況② 西より



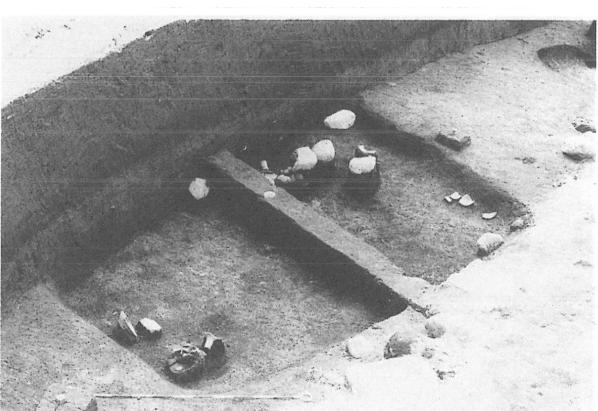
石原遺跡19区 SK01検出状況③ 東より



石原遺跡19区 SK01完掘状況 西より



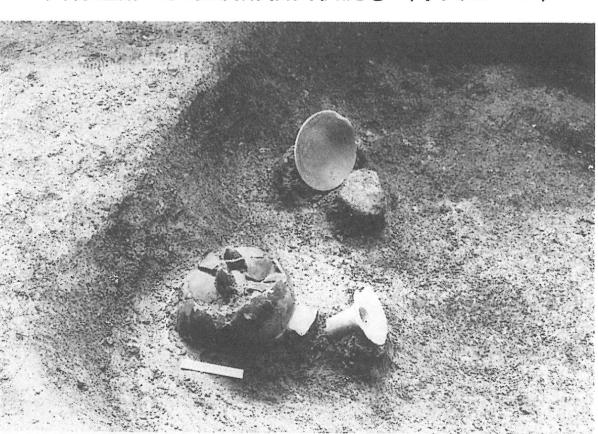
石原遺跡22区 SD01検出状況 北より（本文19）



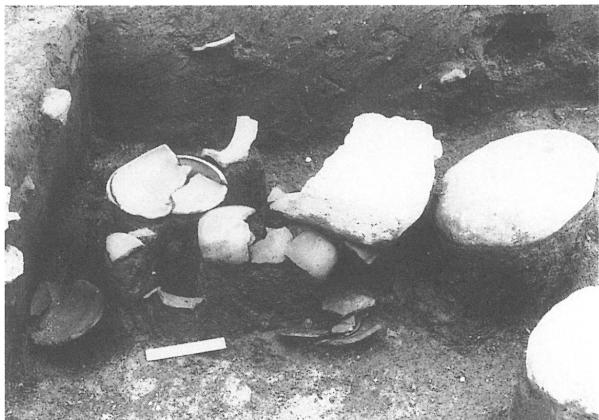
矢房遺跡16区住居跡検出状況①（本文39～44）



矢房遺跡16区住居跡検出状況②



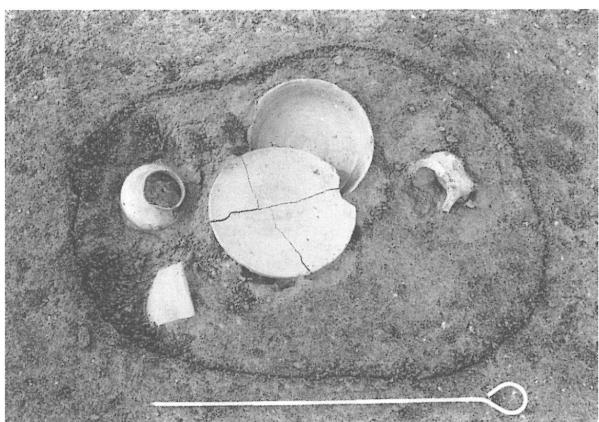
矢房遺跡16区住居跡遺物出土状況①



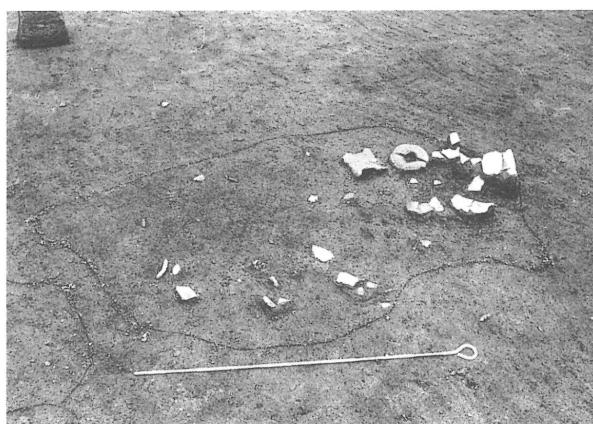
矢房遺跡16区住居跡遺物出土状況②（本文39～44）



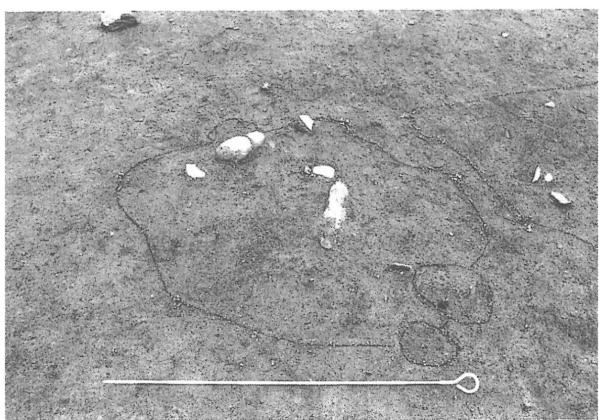
矢房遺跡16区土坑墓（本文44）



石原遺跡 8 区 Pit01検出状況（本文45）



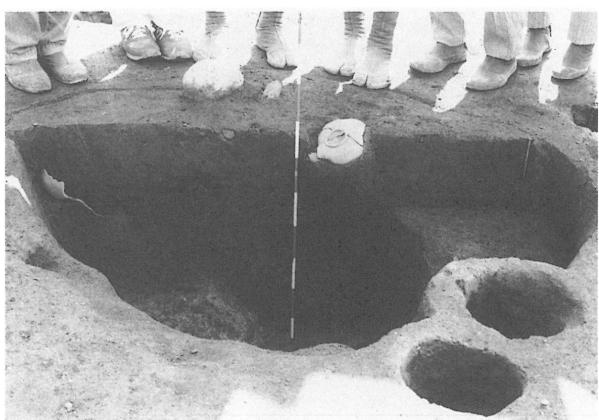
石原遺跡 8 区 SK01検出状況（本文46～47）



石原遺跡 8 区 SK02検出状況（本文48～49）



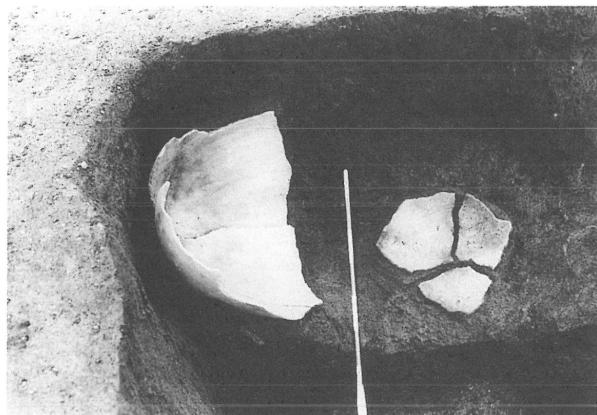
石原遺跡 8 区 SK02半載状況 北より



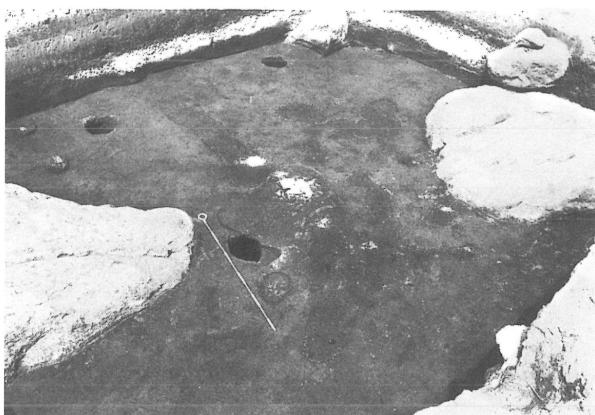
石原遺跡 8 区 SK02セクション 西より



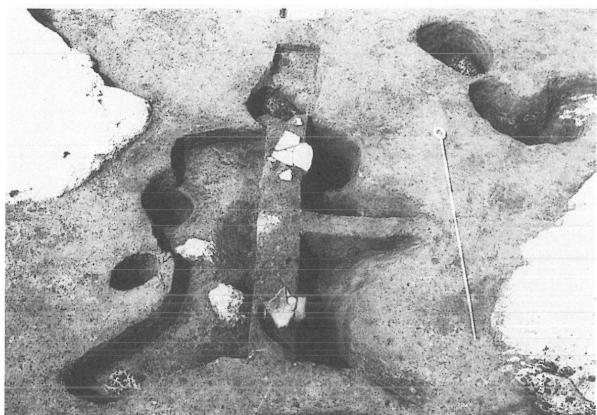
石原遺跡 8 区 SK02完掘 西より



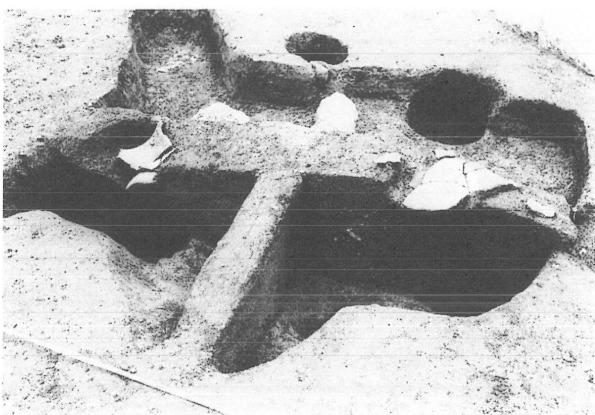
石原遺跡8区 SK02遺物出土状況（本文48～49）



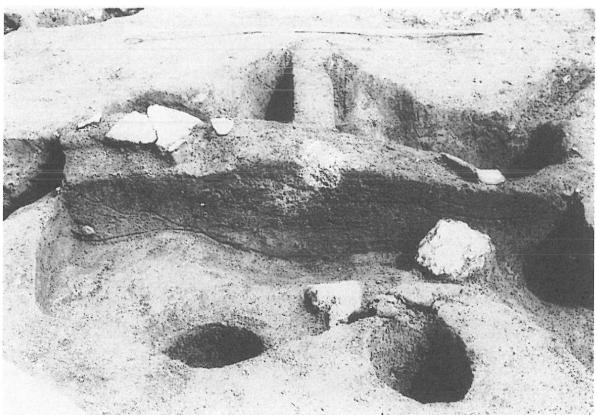
石原遺跡24区 SK01検出状況①（本文51）



石原遺跡24区 SK01検出状況②



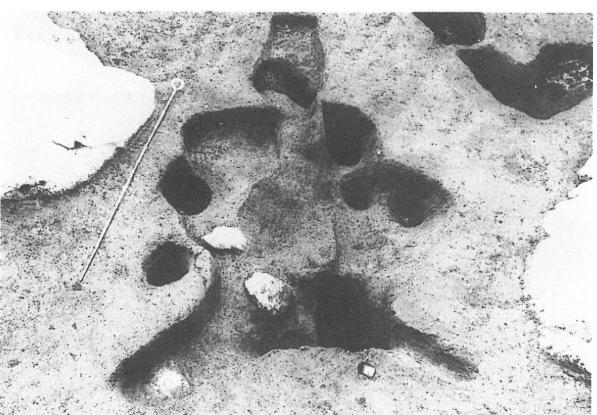
石原遺跡24区 SK01検出状況③



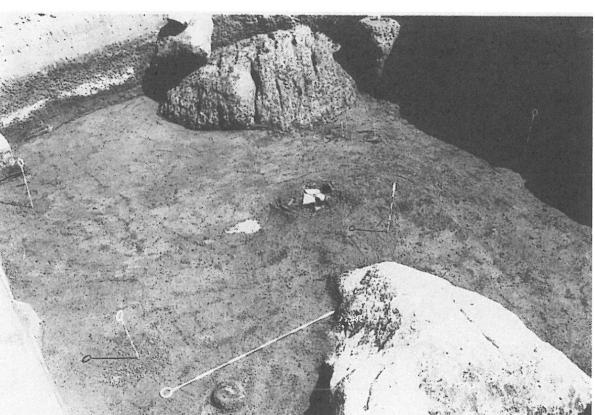
石原遺跡24区 SK01セクション①



石原遺跡24区 SK01セクション②



石原遺跡24区 SK01完掘状況



石原遺跡24区 Pit列検出状況（本文60）